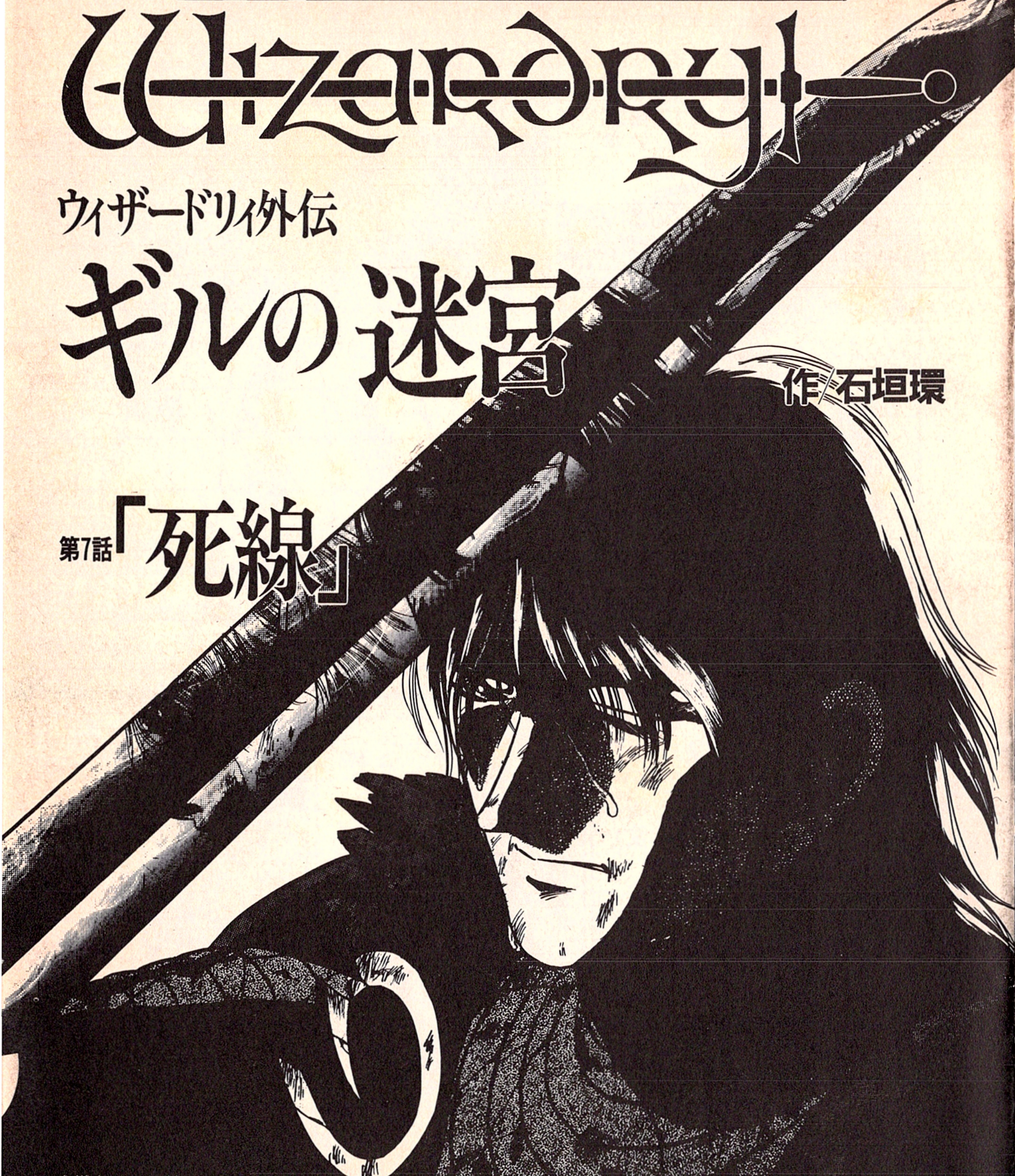
Wizardry

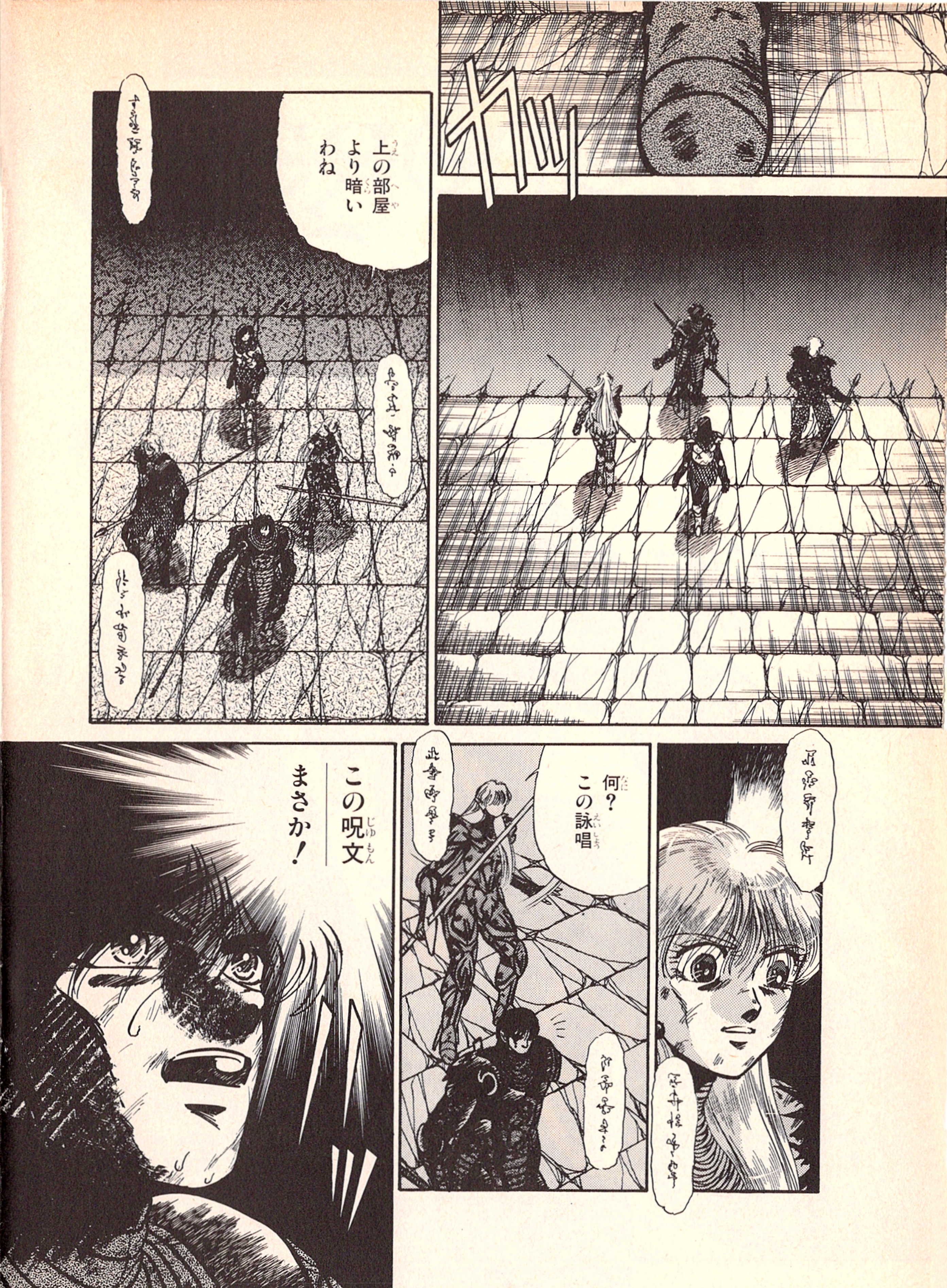
ウィザードリィ外伝
ギルの迷宮

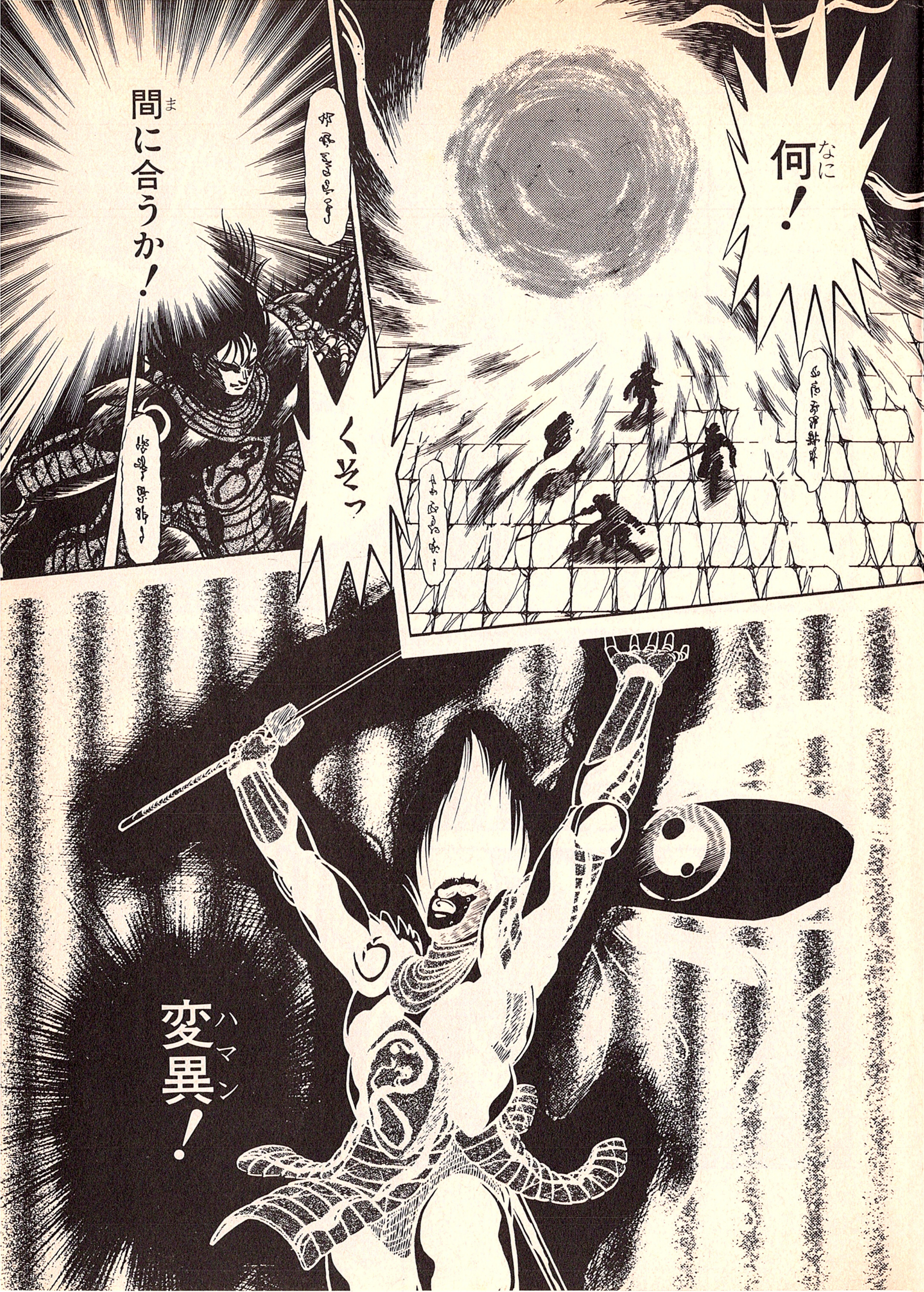
作／石垣環

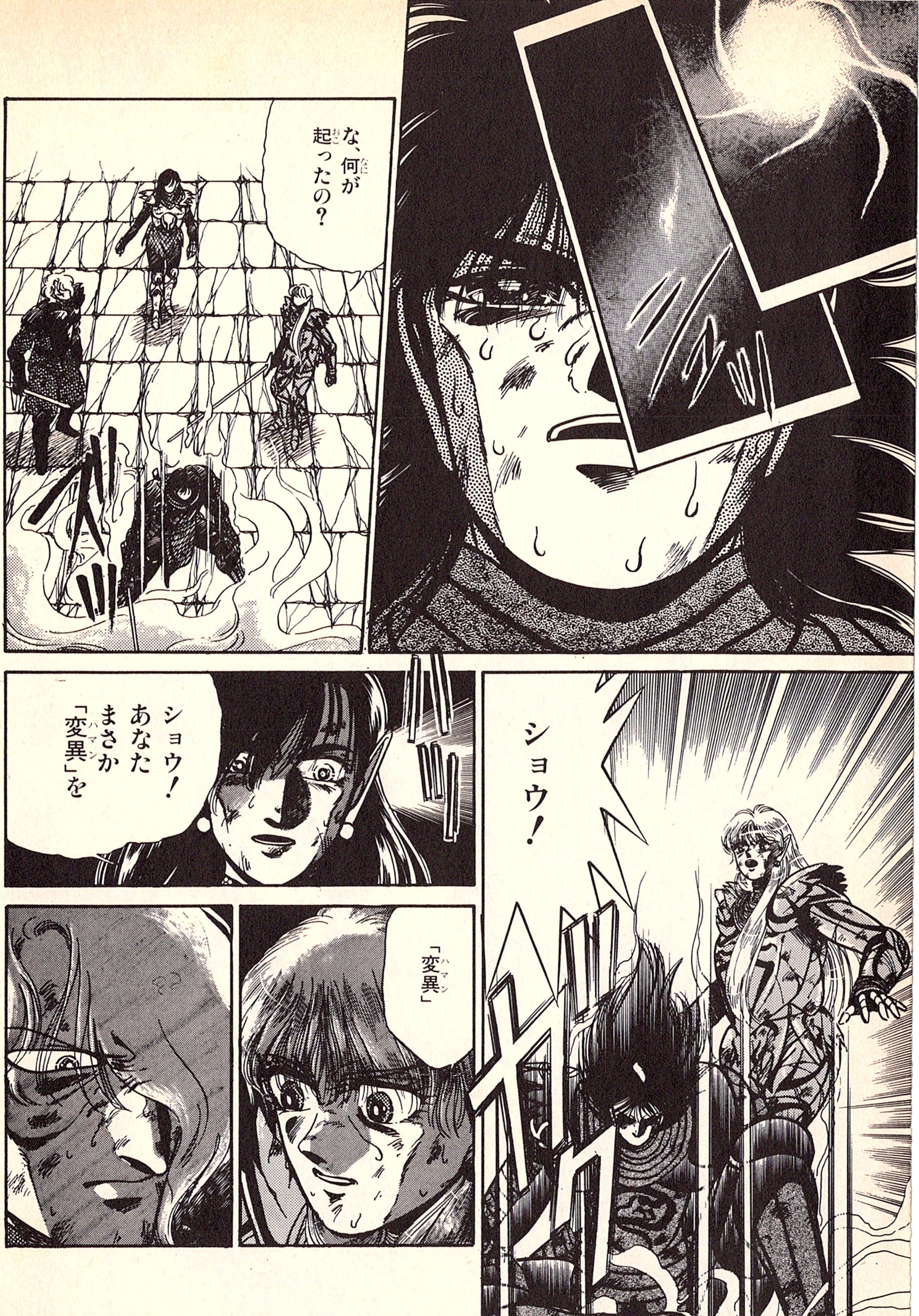
第7話「死線」



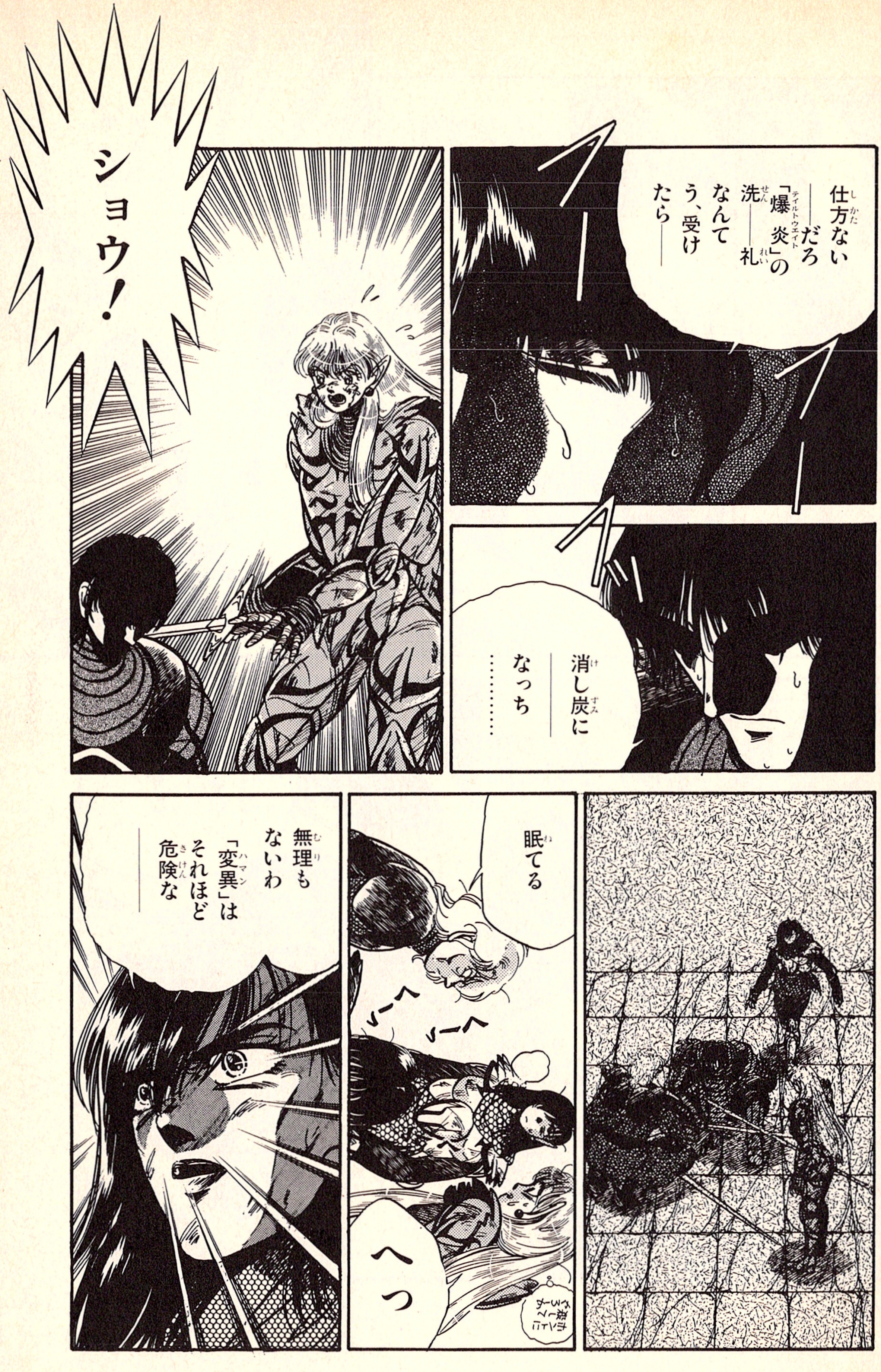
魔導士ギルを斃すために迷宮へと召換された４人。襲いかかる怪物の群れと待ちうける邪教徒との死闘は続く。ビショップのシェーラはかつて自分がギルの高弟の一人であった。ギルの操る「召換の書」は封印された神の眷属を再臨させるものなのか？魔導士ギルとの闘いがついに始まる！絶好調ウィズ外伝のクライマックスだっ！


ガッ
上の部屋より暗いわね
何? この詠唱
この呪文 まさか!


何(なに)！
くそっ
間(ま)に合うか！
変異(ハマン)！

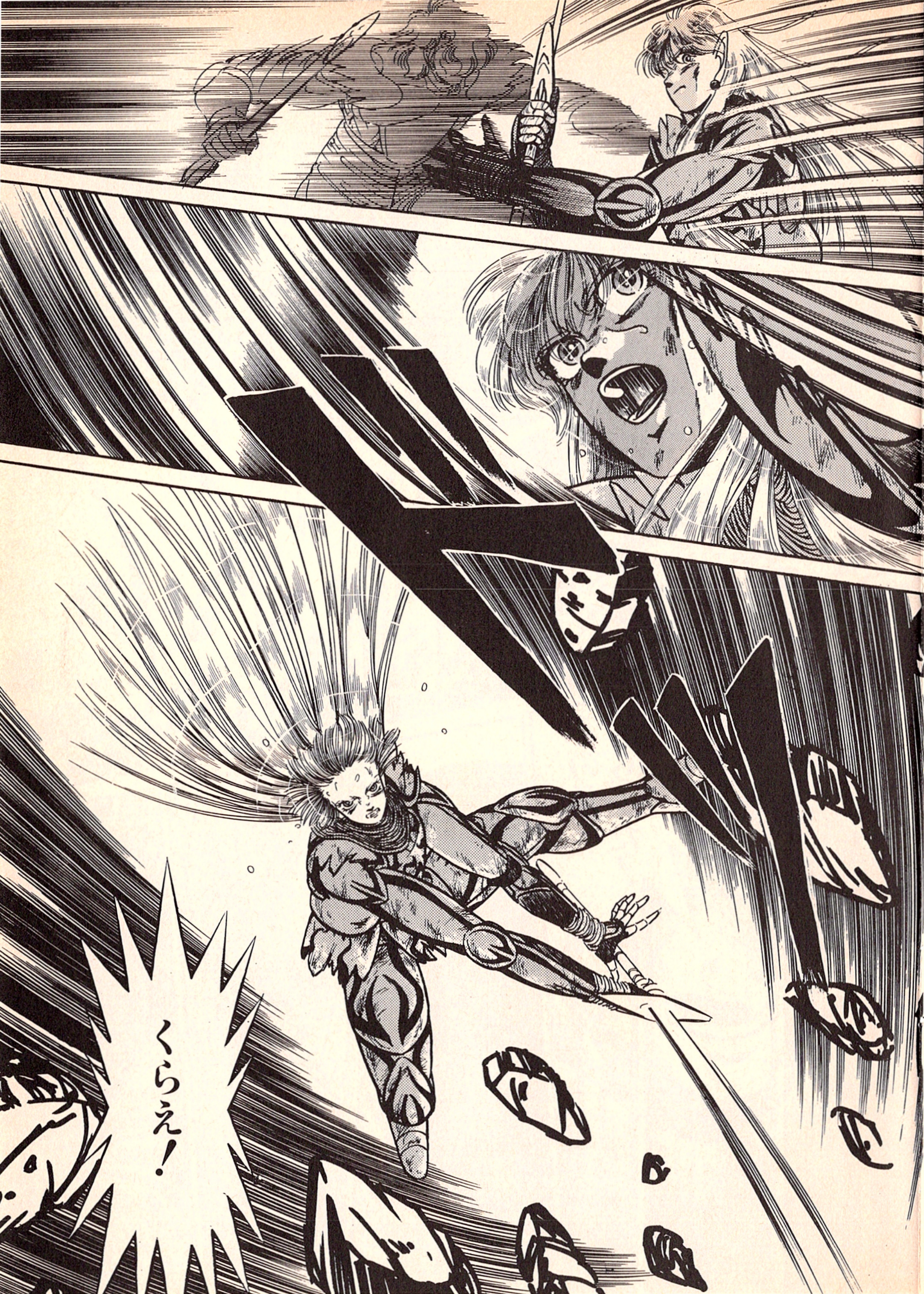


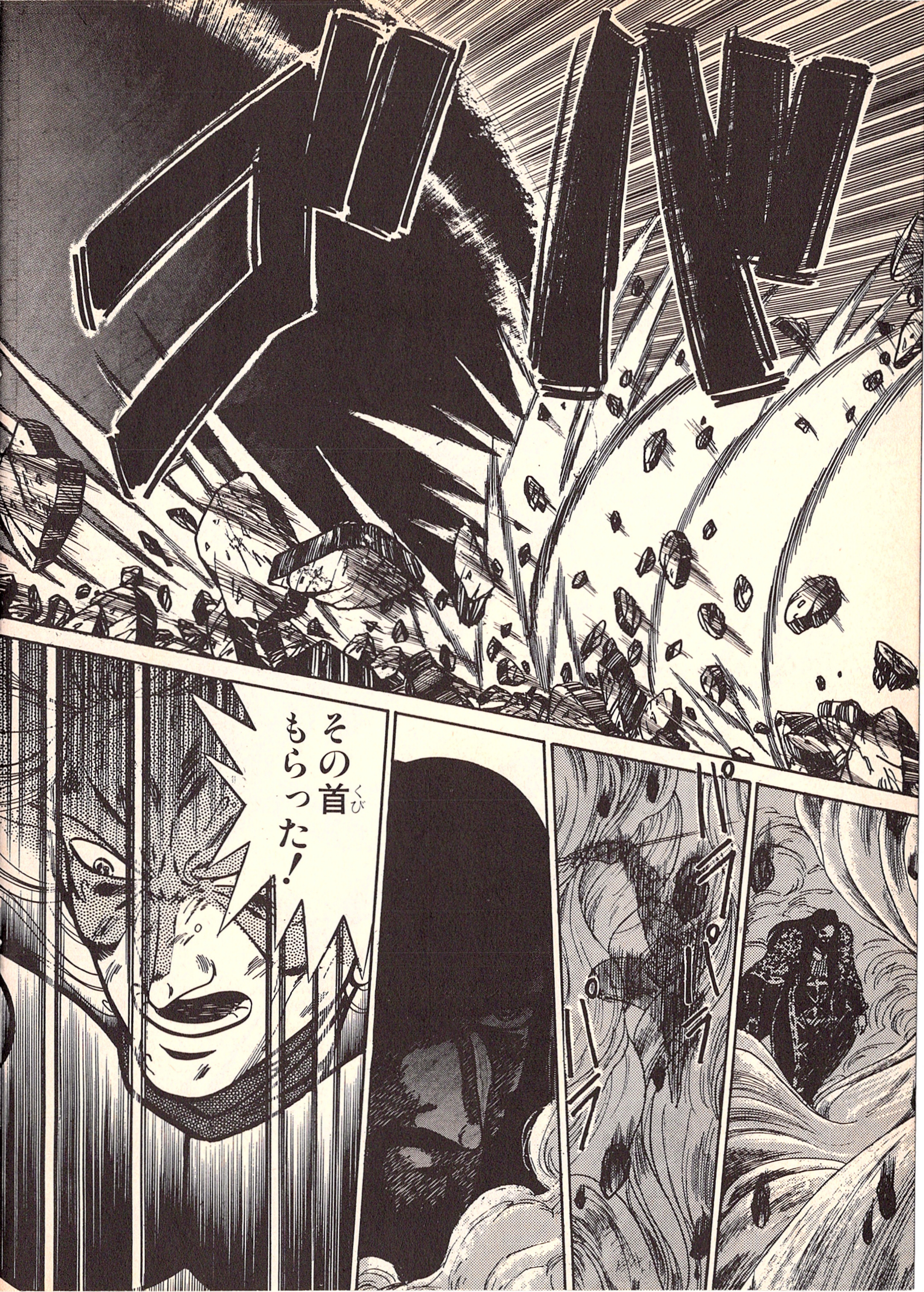
な、何が起ったの？
ショウ！
ショウ！あなたまさか「変異」を
「変異」


仕方ない
——だろ
「爆炎」の
洗——礼
なんて
う、受け
たら——
消し炭に
なっち……
ショウ！
眠てる
へーへー
へーへー
へっ
無理も
ないわ
「変異」は
それほど
危険な——



「爆炎」を「変異」で屠るとはな
ギル！
同時に私の呪力をも封じ込むとは――
なかなかのものよ――
俗界にそのような才能を有する者がおるとはな
不覚と云えば不覚よの――
チラッ


くらえ！


その首もらった！


!
サンザ！


優秀なれど愚かなる者どもよ
この世界は常に異界の脅威に晒されておるのだ
然るに人の能力は衰退の一途をたどるのみ
昔の能力を復活させるには、毒を制するがごとく
「異界の者」をこちら側に導き入れ
人の能力を鍛え直すそれ以外に術はないのだ
何故にそれを理解し得ぬのだ

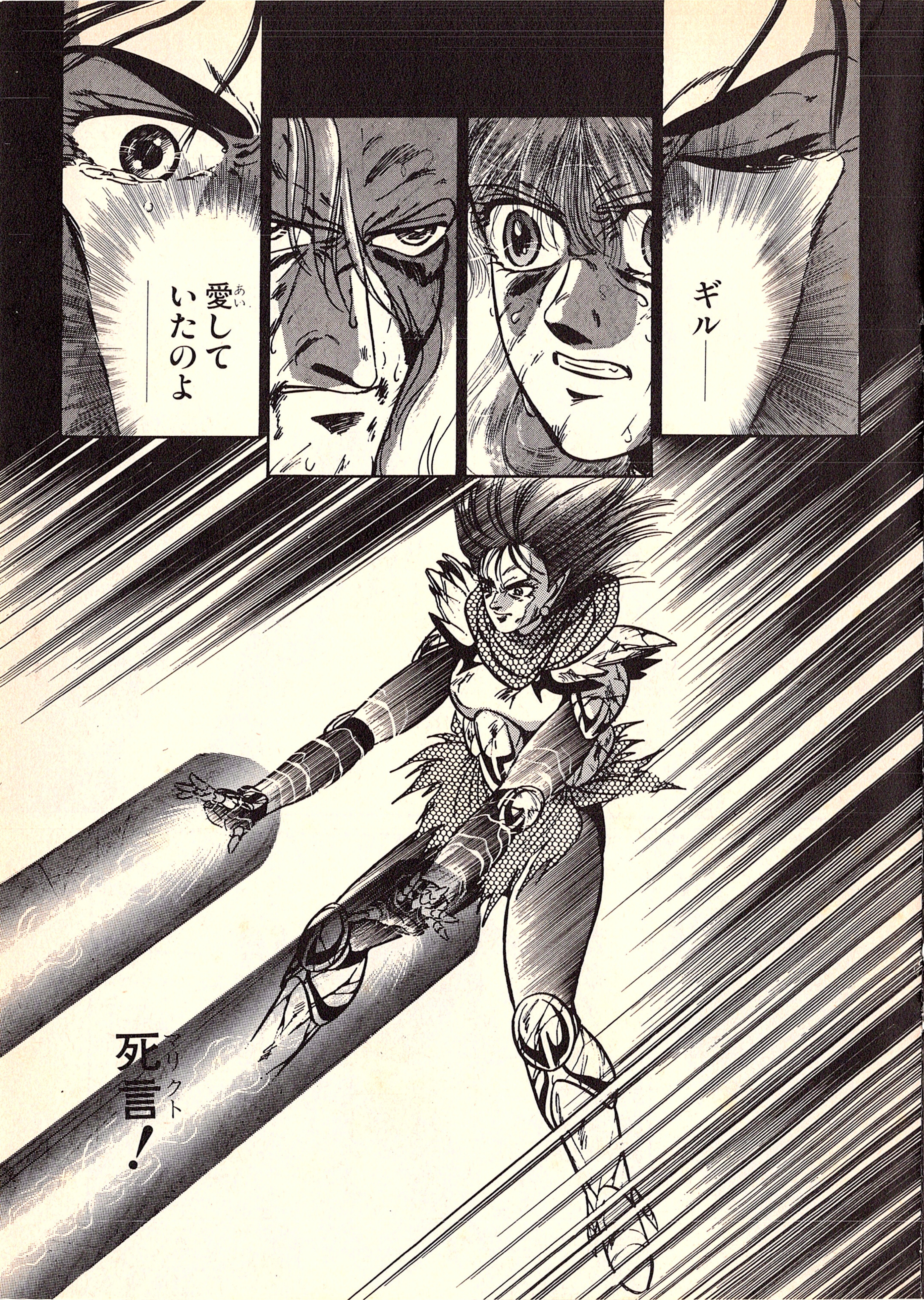


剰え私の斯業の妨害を試みる
御託はそれだけか——
誰の指図かは知らぬが——
差別も争いもない伝説のような理想社会の構築——
そのためにともに集いともに行動して来た
なのに——
その書を手にしてあなたは変ったわ
無差別な殺戮——淫らな儀式——


そんなことで理想社会を築くことができると云えるか！
私はこの「書」を通じ「異界」を垣間見た
そして理解した
人の無力さを
人は変らねばならぬのだ


そのために
優れた資質を
持つ者を
抽出し
その基準は
何処にあると
云うのだ
チッ
次の世代に
伝えねば
ならぬのだ
全て
あなたの
独善に
過ぎない！
やはり
解っては
もらえぬか
解るつもりも
ない！
ならば
消えて
もらうしか
ないな


でも呪文を封じられたあなたに何が――
ピクッ
気付いたか さすがだな
かつて私に二世を誓わせただけのことはある――
ならば「異界の者」が出現する前にギル
あなたを殺すだけよ


ギル――
――愛(あい)していたのよ
死言(マリクト)!


やったか!

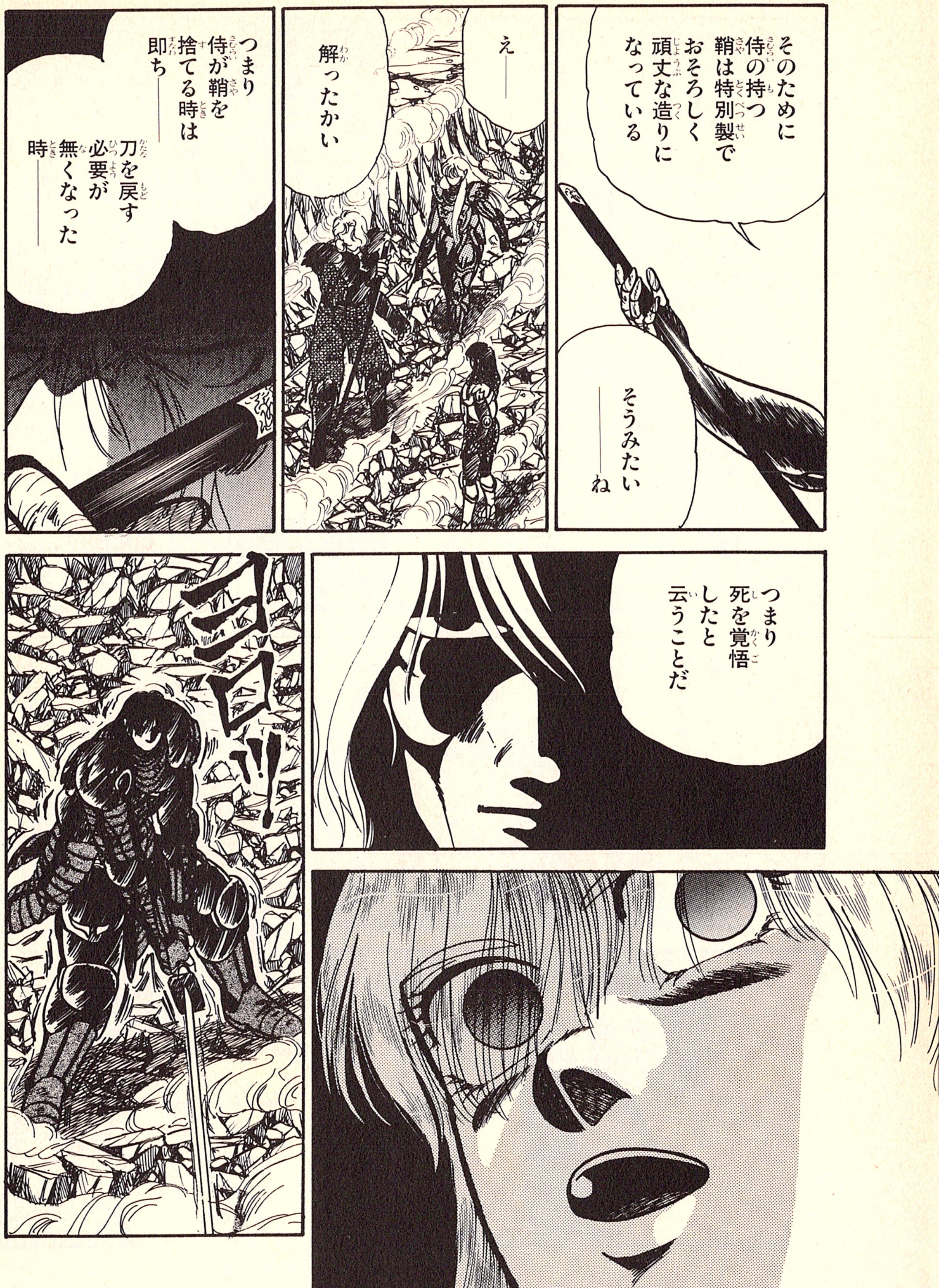

効かぬ
そんな——
「死言」を喰っても——
「召喚の書」が私の手の内にある限り
剣圧も呪文も私には通じぬ
もっとも「変異」「大変異」だけはこの書でも防ぎきれないが——
今唱え得る者も存在しない


私の手を汚すまでもない――
じきに現れる「異界の者」が
汝らの始末つけてくれようぞ――
な、何もできないと云うの
ここまで来て――
ギル……

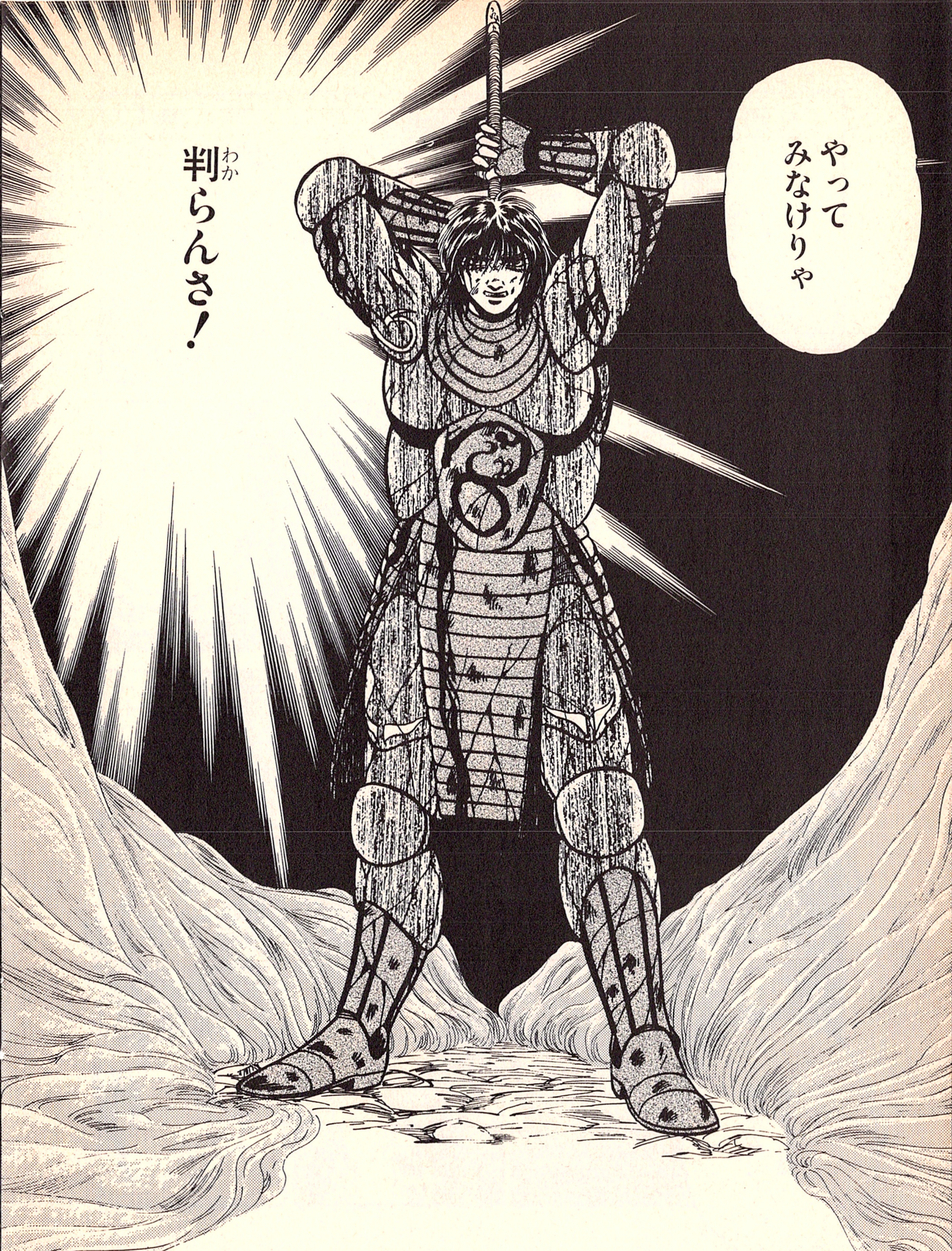

くっそ——
ショウ!
お姫様らしくない汚ない言葉遣いだな
うるさくて眠ていられねえよ……
大丈夫?
まあね


でもギルには——
分ってる——
「変異」を唱えたせいで気でも触れたか——
そうかもしれんな——
下っていてくれ——
ショウ!


サンザ——
姫将軍 侍にとっての刀と鞘の意味を知ってるか
うーん
侍にとって刀は己の生命を表し——
鞘は生命の還るところを意味しているんだ


そのために侍の持つ鞘は特別製でおそろしく頑丈な造りになっている
そうみたい——ね
え——
解ったかい
つまり侍が鞘を捨てる時は即ち——
刀を戻す必要が無くなった時——
つまり死を覚悟したと云うことだ


くっそ——眼が
霞みやがる——
やれる・・・かな——
疑念は即ち失敗に通ずる！
ハイハイ父上——
解ってますよ
無駄と云っておろうが
無駄かどうかは——



次号（Vol.3 1月19日発売）につづく!!　　TOBE CONTINUED

Wizardry II

小説ウィザードリィII

風よ。龍に届いているか

第7回

嘆きの精の予兆を裏づけるかの如く
ガッシュたちの消息が途絶えた。
地震が何かを狂わせたのか。
それとも狂気が異変を惹き起こすのか。
着々と、密やかに魔が胎動を始めた――。



作／ベニー松山
イラスト／高橋政輝

〔第七章〕捜索

俺とザザは冒険者の宿の食堂で、早めに用意された朝食を胃袋に流し込んでいた。

メニューは少々固くなったパンに申し訳程度のバター、それに塩漬けの肉と塩辛いだけの湯のようなスープだ。これにわずかに甘味のある茶がつく。水っ腹になりそうな食事だが、少なくとも乏しい配給で空腹感を紛らわせる工夫はなされている。

ようやく空が白んできた時刻だが、ほとんどの冒険者が身支度を整えて食堂に集まっていた。

二十人ばかりが食事をしているにもかかわらず、昔は舞踏室として使われていただっ広い食堂は、やけにしんとした雰囲気に満ちていた。

恐らくその場にいた全員が、漠然とした不安を抱いていたからだろう。

昨夜の地震による市内の被害は驚くほど軽微だった。先刻辺りを見回ってきた盗賊の話によると倒壊した家屋は一件もなく、広場に陣取っている避難民たちの仮設小屋が多少傾いた程度、怪我人も家具の下敷きになって骨折した者が十数人、といったところらしい。

俺は黒っぽいパンの最後の一切れを飲み下し、アルビシア諸島の特産品だった紅い茶をすすって一息ついた。

「——考えたくはないんですがね」

細長い食卓の向い側に座ったザザが、頃合いを見計らったかのように口を開いた。夕食を食いっぱぐれて空腹の極にあった俺は相当な勢いで朝食を詰め込んでいたのだが、この男はそれより早く全ての食物を腹に入れてしまい、俺が食い終るのを待っていたのだ。

「あの地震で、ガッシュたちが無事だと思いますか」

「判らねえ」

このところ薄くなった茶を飲み干して俺は応えた。「もともと火山の中にある迷宮だ。ちょっとやそっとの揺れでがたがくるとは思えねえんだがな」

「ルケブレスにもかなりの力があるでしょうからね。しかし、あの結界は迷宮を保護する類のものではない筈です」

ザザが言っているのは迷宮全域に張り巡らされた魔法障壁のことだ。宝珠を探索する冒険者の戒律に反応するこの障壁は、六層ある階層のうち第二、第四層に俺たち悪の者、第三、第五層に善の者が侵入できない

前号までのあらすじ

精霊神グニルダの恩寵により、あらゆる外敵から守られ続けてきたリルガミン市。しかしその聖都も原因不明の天変地異に見舞われ、滅亡の一途を辿っていた。異変の原因究明のため王国は多数の冒険者を募り、街の北に聳える禁断の山に隠された神秘の宝珠の探索を命じた。

探索を続けて約一年。冒険者たちは自らの能力を磨き、山中の迷宮は宝珠の守護龍ルケブレスの護る最上層を残して全て踏破された。使命の達成は目前であった。

主人公ジヴラシアは独り迷宮の怪物相手に実戦経験を積み、リルガミンに帰還しようとしていた。その帰途、マイノスたち善のメンバーを連れたガッシュ、ボルフォフらがいよいよ迷宮最上層へと向かう場面に出くわす。直後に出現し、迷宮を指し示す死を告げる精霊バンシー。さらにその夜、夢の中で人を堕落させる夢魔の出現や大規模な地震、そして岩山の山頂の発光現象と続けざまに怪異が起こり始めた——。

主な登場人物

●ジヴラシア……主人公。レベル13の忍者。悪・人間族。この物語の〝俺〟。
●ガッシュ……レベル15の戦士。中立・人間族。
●マイノス……レベル12のロード。善・人間族。
●フレイ……レベル13の盗賊。中立・ホビット。
●ボルフォフ……レベル13の戦士。中立・ドワーフ。
●ザザ……レベル13の僧侶。悪・人間族。
●アルタリウス……レベル13の僧侶。善・ノーム。
●エレイン……レベル13の魔術師。善・エルフ。
●ルケブレス……迷宮を支配する龍。〝平衡の守護者〟。

ように特殊な結界を形成している。

それ故、全ての階層を探索するためには善悪の協力が必要となる。しかし、善と悪の者だけではそれがうまくいく訳もない。

そこで、この迷宮の探索者は変則的なパーティを組んでいる。ガッシュやフレイ、ボルフォフのように戒律に縛られない中立の冒険者を軸に、探索階に応じて善と悪のメンバーを入れ替えるのだ。

中立・無戒律の冒険者だけでパーティを組めば結界に影響を受けることはないが、これは不可能に近い。というのも、主に治療呪文を司る僧侶系の職業に中立の者が就くことはできないからだ。僧侶呪文が神への絶対の信仰を力の源とするために、善悪の戒律を持つ者に比べて強い指向性に欠ける中立の者には扱いきれないのだ。

怪物と罠のひしめく迷宮内で、治療呪文が切れるということはかなり切迫した生命の危機を意味する。戦闘での手傷はもとより、魔物の爪牙に秘められた猛毒や麻痺毒を治療できなくなれば、迷宮で最も機能する六人パーティのコンビネーションが崩れ、戦闘力は一瞬にして激減するのだ。まして最初から僧侶呪文を使い手抜きで迷宮に入るなど、マスターレベルの冒険者でも自殺行為とされている。

呪文を持たない俺が一人で迷宮をうろつけるのは、むしろ独りだからできると言っていい。隠身術を体得した忍者でなければ分の悪い戦いを回避することはできないだろうし、また複数ではそれだけ敵に気取られやすく、奇襲をかけられる確率がぐんと増すのだ。その点俺一人なら、危険な有毒生物や多勢の敵パーティをやり過ごすなどお手のものだ。

生きて迷宮から戻りたければ、僧侶呪文を操る者がパーティに一人は必要となる。特にレベル11以上の僧侶が習得することのできる快癒の呪文は、瀕死の重傷を負った者を瞬時に全快させると同時に、あらゆる病毒――魔法による催眠状態や毒・麻痺及び重度の麻痺である石化状態――を打ち消す治療回復効果を持っており、これが使えると使えないではパーティの生還率は雲泥の差となるのだ。

また、通常俺の職業である忍者は悪、マイノスのロードは善の戒律を持つ者しか就くことはできない。自分で言うのも何だが、俺たちの戦力を考えても中立の者だけで無理にパーティを構成するメリットはないだろう。マイノスは気に食わないが、俺にもロードというエリートクラスの力を認めるくらいの分別はある。

そうして成立したのが、ガッシュたち中立のメンバー三名に、俺たち悪とマイノスたち善のメンバー三名ずつという総勢九名の部隊だ。つまりガッシュ、フレイ、ボルフォフは善のパーティであるとともに、俺やザザの仲間でもある訳だ。

「もし無事じゃなかったら、お前はどうする」

「私ですか」

俺の問いに、ザザは卓上の空になった食器に視線を落として思案するようなポーズをとった。表情はいつもと変わらぬ微笑を浮かべている。

「打つ手はなし、ですね。助けに行くにも我々は第二、第四層には入れない。まして最上層に入るにはル’ケブレスの結界を無効にする水晶が必要でしょう。そして、それを持っているのは当のガッシュたちですから」

予想通りの答だった。打つ手なし。まさにその通りだ。

ル’ケブレスの迷宮の最上層には、善悪の結界とは別の魔法障壁が張られている。転移の呪文を弾き返し、全ての冒険者を拒む特殊結界――それを乗り越える術こそが、善と悪の協調の証なのだ。

マイノスたちが第四層に潜んでいた伝説の悪魔像デルフを破壊した際に入手した悪の水晶と、俺たちが第五層の天使集団を撃退して手に入れた善の水晶。どちらもル’ケブレスが召喚した善と悪の象徴的存在を斃すことで入手できた代物だが、初めは単なる宝石の一種としか思わなかった。が、こいつに秘密が隠されていた。

二つの水晶に封じ込められた善の力と悪の力。それが打ち消し合うことによって全く別の一つの宝石・中立の水晶に変化すると俺たちが気づいたのはつい先日のことだ。そしてこれこそが最上層の特殊結界を無効化する、ル’ケブレスの求める証だったのだ。

もしガッシュたちが最上層で遭難しているとすれば、水晶を持たぬ他の者が救助に向かうのは不可能だ。さらに言うなら、宝殊の探索自体が不可能ということになる。

「考えてみれば、かなりやばい状況だな」
「だから考えたくないって言ったんですけどね」
そこに一人の男が近づいてきた。
「よう。どんな気分だい」
肉を奥歯で噛み潰しながら、ユーモアのかけらもない挨拶を飛ばしてきたこの男は、俺たちとは別のパーティに参加している中立の侍・ハイランスだ。エルフにしては珍しくグレイの口髭をたくわえているが、情けないほど似合っていない。
「いい訳ねえだろう」
「片翼奪われた小鳥の気分ですかね」
ほとんど同時に応えた俺とザザを交互に見て、ハイランスはにたっと笑った。
「怒るなよ、ジヴ。うまいこと言うね、ザザ」
「こっちの気分を考えてから挨拶を選びな。で、何だよ」
「いやな、マイノスたちの捜索の件だ」
そう言ってザザの隣に腰を下ろすと、ハイランスは片手に持ったカップから茶をずずっと啜った。「とりあえず組める限りの善のパーティは迷宮に入ってみるつもりだ。限り、と言っても三部隊だがな。一、二階と四階を調べるには充分だろう」
「縁起でもねえな。まるで遭難が確定したみてえじゃねえか」
「実はな」
ハイランスは真顔になり、声をひそめた。「ブライスに探魂の呪文を使ってもらった。様子がおかしい」
俺はさっと緊張した。探魂は僧侶系第五レベルの呪文で、誰かの居場所を念視する時に使う。大まかな位置しか判らないためほとんど使用されないが、このような状況には極めて有効だ。少なくともその者がこの世に存在しているかどうかが判るからだ。
その呪文を使った結果に異状ありとなると、これはもはや予測の域を越える。現実にガッシュたちの遭難があったということになるのだ。最悪の場合、もはや存在していない状態——消滅もありうる。
「おかしい、とは？」
ザザの顔からも笑みが消えている。
「いや、念視できないとか——つまり消滅だな、そういう訳じゃないらしい。全員の反応はあるんだ」
「それじゃ何が——」
「どこにいるかが念視できない」
俺を遮るようにハイランスが言った。「何層目の、東西南北どのエリアにいるのかさっぱり判らないそうだ。ブライスに言わせりゃこんなことはありえないさとさ」
「呪文の唱え方が間違ってるんじゃねえのか」
言いながら、その可能性は薄いと俺は思っていた。
ブライスはハイランスのパーティの悪の僧侶だ。ザザやアルタリウスと同じくマスターレベルで、特に透視や探魂などの魔法念視を得意としている。たとえ寝ぼけていても呪文をしくじったりはしないだろう。
「妙ですね、確かに」
「だろ？　それに地震の後のあの光だ。こいつはどう考えても連中の身に何かが起こっているんじゃないかってな」
ハイランスは残りの茶を含むと、口をゆすいで飲み込んだ。
「まあ、考え過ぎかも知れん。もしかすると今頃連中が宝珠を持ってスケイルから出てきてるってこともあるしな。お前さんたちが水晶をふたつ手に入れちまって以来、俺たちはちょいと気が抜けてたとこだ。どのみち丁度いい運動になるさ」
そう言ってハイランスは席を立った。
「いつ出発する？」
俺が訊ねた時、中庭の方角から呼び子の音が響いた。
「こいつがお迎えさ」
エルフはにっと歯を見せた。そして向き直り、
「ぐずぐずするなよ、野郎ども！　久し振りの出番だ。迷子が泣き出さないうちに連れ帰ってやろうぜ」
おう！　と応えがあった。食事を終えた者は立ち上がり、そうでない



者は慌てて残りの朝食を詰め込み始める。
「出発は五分後！　それまでに装備を掻き集めて中庭に集合だ。乗り心地抜群の特等馬車が、俺たちの尻をどう痛めつけてやろうかと手ぐすね引いて待ってるぞ」
　げらげらという笑い声で、食堂はにわかに活気づいた。先刻までの不安な雰囲気は、ハイランスの号令で吹き飛んでしまったようだった。
「ひねりの利いた話もできるんじゃねえか」
　俺は多少皮肉を込めて言った。
「いつも利かせてるさ。それをお前さんが解さないだけの話だ」
「ハイランス、用心してかかって下さい。呪文が効かないと言うのはよほどのことです」
　少しの間考え込んでいたザザが言った。「想像以上に、悪い事態かも知れませんよ」
「判ってる」
　ハイランスは表情を引き締めた。「こんな時に限って悪いことは重複して起きるもんだ。留守を任せたぞ」
「はい」
　ザザは頷き、俺は無言で片手を上げた。
「おっと、俺が遅れちゃ恰好がつかん。じゃあな」
　言って、ハイランスは足早に食堂の出口に向かった。
「あれで頼りになる人ですからね」
「まあな」
　数人の冒険者をつれて出口から消えようとするハイランスを見送りながら俺は応えた。「手回しもいいしな」
　一見抜けたお調子者に見えるハイランスだが、それはあくまでうわべだけのことだ。侍（サムライ）という魔法剣士としての技量もさることながら、見かけとは裏腹に戦闘の指揮に関しては右に出る者がないとされる冒険者きっての戦術家なのだ。
　奴は恐らく地震の後すぐに、この捜索の計画を練り始めたのだろう。居残り組になる悪（イビル）の僧侶（プリースト）ブライスに探魂（カンディ）の呪文を使わせ、善（グッド）の捜索隊の呪文を温存したのはさすがだし、送迎馬車をいち早く呼びに行かせ、三グループものパーティを取りまとめた手並みは大したものだ。
　俺も軽口を叩いてはいるが、この品のないエルフに一目置いているのは確かだった。
　俺は立ち上った。
「どちらへ？」
「ディーを叩き起こしてくる」
「そろそろいい時刻ですからね」
「今ざっと見回したんだが、どうやらまだ起き出してないのはあいつだけらしい。あの地震で目が覚めねえってのもどうかしてるが、仲間の捜索隊が出るって時に俺たちが揃ってないんじゃ面目ねえだろう」
「つき合いましょうか」
「いらねえよ」
　おれはまだ騒がしい食堂を、出口に向けて歩き出した。
「ジヴ」
　座ったままのザザが呼び止めた。「例の件は、夜までにもう少し調べをつけておきます。それまでは、迂闊な行動は避けて下さい」
「ああ、頼んだぜ」
　俺は食堂を後にした。
　廊下を少し行くと、すぐにロビーに出る。そこには気の早い数人の冒険者がすでに武器や防具、それに魔法のかかった護符などの品々を携えて出発を待ち構えていた。
　ハイランスのパーティだった。どうやらこの連中は号令がかかる前に部屋に戻り、探索の準備を整えていたらしい。
　善（グッド）のパーティのため、俺は無言で通り過ぎようとしていた。こんな時にいざこざを起こすのは頂けない。
「待ちなって、ジヴラシア」
　一人が俺を呼び止め、走り寄ってきた。
　でっぷりと太った三十半ばのノーム、中立（ニュートラル）の盗賊（シーフ）アルフだ。今朝方市街を偵察してきたのはこの男だ。

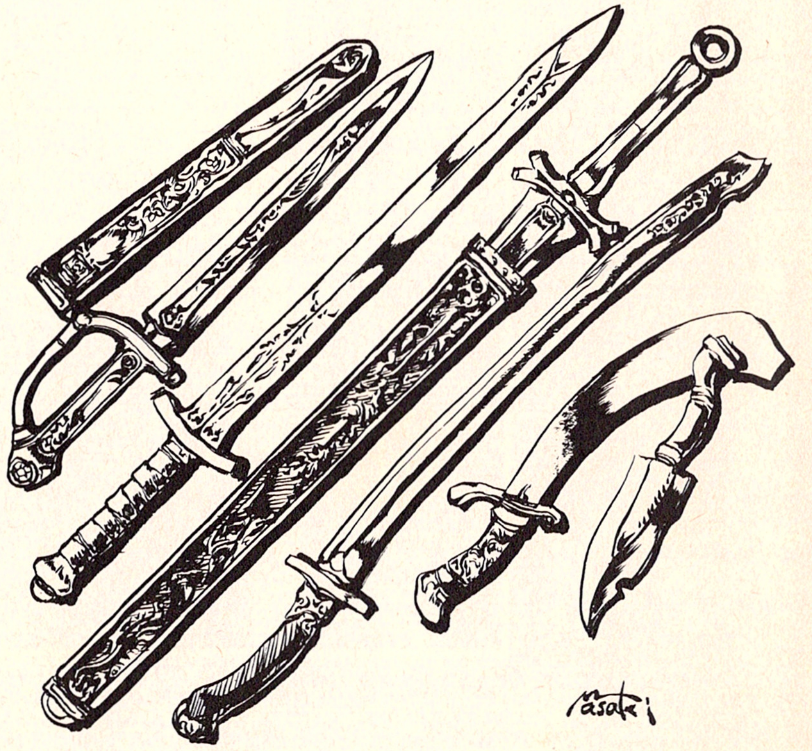
WIZARDRY Ⅱ

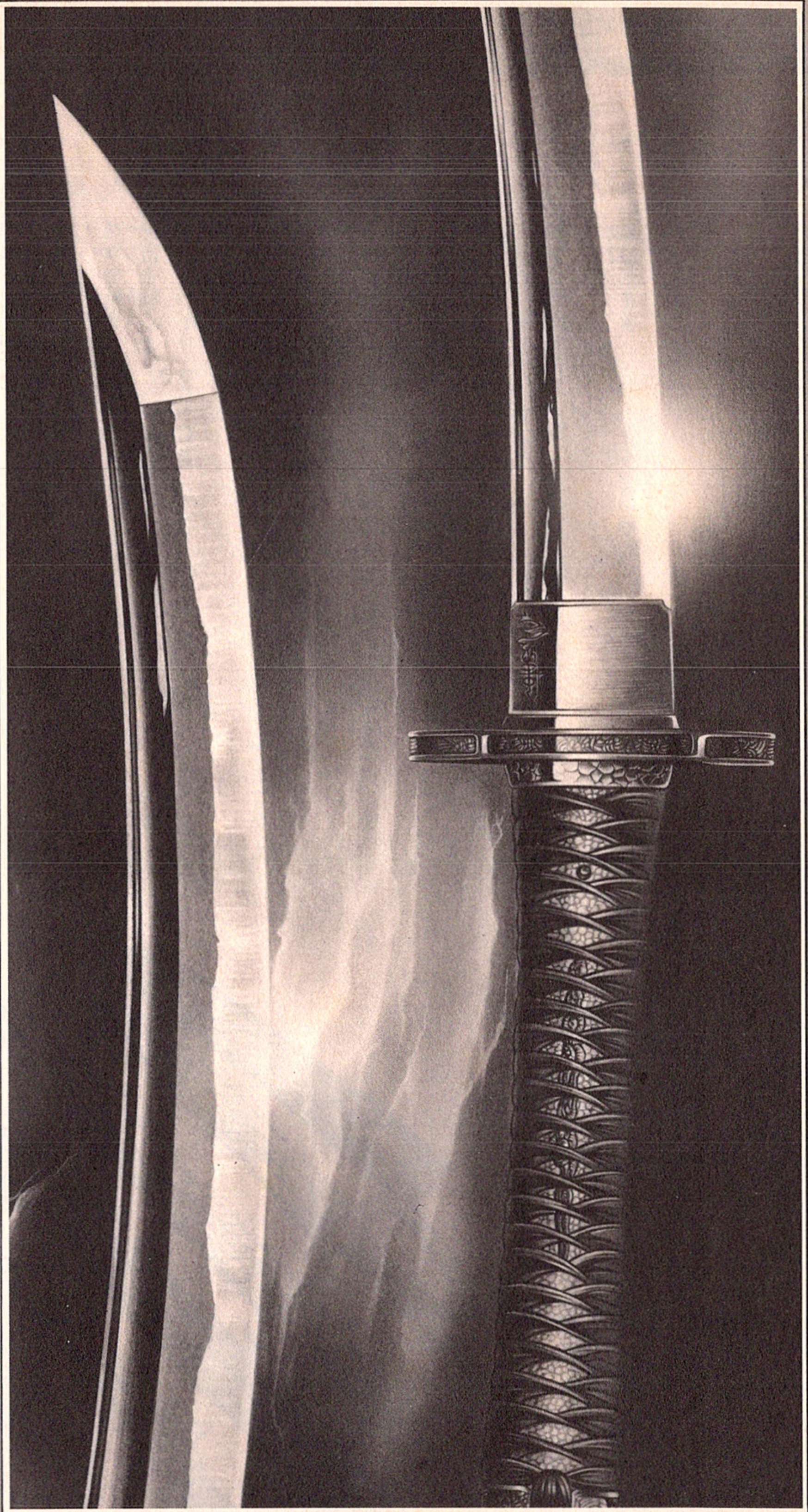
風よ。龍に届いているか

「あんたの仲間を探しに行くんだぜ。挨拶は、挨拶」
俺はおどけた調子のノームを睨めつけた。「おはよう」
怒気を含んだ挨拶にアルフは鼻白んだ。
「冗談だよ、冗談。忍者ってのはどうにも気難しくっていけねぇ」
アルフは大袈裟に首を振った。首回りの肉がぶるぶると震えるさまは見ていて気分のいいものではない。
俺はそのまま歩き出そうとした。
「待てって。本当に話があるんだよ」
「なら急ぎな。もう三十秒は無駄にしたぜ」
「あんた、嘆きの精を見たんだってな」
アルフは秘密を囁くように声を落とした。「あの地震とスケイルの光で衛士の坊やがすっかりぶるっちまってな、みんな喋っちまったよ。もうちょっとした騒ぎになってる」
俺は思わず舌打ちした。俺の苦虫を嚙み潰したような様子にアルフがほくそ笑む。この肥満したノームは自分の垂れ流す情報で人が困惑するのを見るのが愉しみなのだ。
「そのうち王宮のほうからもお呼びがかかるぜ。あの小生意気なベイキ女王が〝詳しい話をお聞かせ！〟ってな」
肉のたっぷりついた頬を緩ませて、アルフは満足そうに立ち去った。
全く面倒なことになりやがった。ベイキの小娘が今日中にも王宮に召喚をかけてくるのは確実だろう。
ロビーに集まる冒険者の数が増えてきた。間もなくハイランスも戻ってくるだろう。
俺は重い気分のまま、二階へと歩き始めた。

(次号につづく)

あとがき
年が明けてしまった。
まずは、おめでとうございます。'90年も何卒よろしくお願い申し上げます。
などと年の瀬も押し迫った時に書いているのは何とも変な気分だが、本というものは原稿を上げて一日二日でできるものではないので、まあしょうがない。それに、年賀状だって年末に書くものだし。
それにしても、随分登場人物が増えてきた。
そもそもウィズIIは善と悪のキャラクターがどうしても必要なシナリオなので、それだけ人物は多くなってしまう。さらにそこに他のパーティが絡んでくるとなると、もうこれはとんでもない大所帯になる。
そこをいかに押さえるか。これが大変なのである。
そんな訳で、次号は冒険者の紅一点・悪の魔術師ディーが新登場する。
え？　押さえてないって？(笑)
(ベニー松山)





●コミック版
ウィザードリィ外伝
――ギルの迷宮
作／石垣環

●小説ウィザードリィII
風よ。龍に届いているか
作／ベニー松山
イラスト／高橋政輝

▶コミック版ウィザードリィ外伝・ギルの迷宮は反対ページ(P136)からお読み下さい。